

批評

リース博士『世界史』

G. Weber, Allgemeine Weltgeschichte, 3 A. Vollständig neu bearbeitet
von Ludwig Riess. Leipzig. 1919 (Bd. I.), 1920 (Bd. II.)

文學博士 坂 口 昂

昨年一月の「史學雜誌」に於て、私はリース博士のウエーベル「小世界史」改作版全二冊を紹介且批評し、それが、内容に於ても外形に於ても徹底的

改造を受け、全然博士の學的人格の表現なることを指摘した。今同一のプランに基く同じ原著者の「大世界史」改作版、全十六卷の内、最初の二卷に接手して、私は一層切實に博士獨自の世界史的

識見と世界史的綜合及び學殖とを感知するの外はない。所謂同一プランに關しては、讀者が前掲雜誌に就きて一瞥されんことを望む。

ウエーベル大世界史第一版の刊行は、一八五七年に開始せられた、その第二版は一八八二——八九年間に完成された。その今日まで普通行はれて居るのは、即ち後者である。凡そ單一人の歴史家

が世界諸國に跨り古今に互りて提供した報道と知識の蓄積に於ては、近時ウエーベルを凌駕したるものはなく、因て、その著、或は古代羅馬時代の希臘人ディオドールの一切包括的作品に尤も適切に比當される。ランケの偉大とその長き學問的生涯を以てしても、彼が晩年みづから世界史執筆を企て、(恰もウエーベル第二版と同時)、自分の手で出版し得たのは、その九卷中の唯だ最初の六卷にして、その表現は中古の半ばまでに止まる。それだけ一層驚嘆に價するものは、ウエーベルの大述作であらねばならぬ。

しかし、ウエーベルの史觀とランケのそれとがその間に大いなる距離があることは言ふを俟たぬ而してリース博士は後者の信奉者である。これに隨つて博士の執り來れる發展史觀、統一的把握、同時代綜合方法シムルツニツクは、第一卷の劈頭、「世界史の使命」の題下に於て大略表白されて居る。私がこの

部分を安藤學士と共に譯出して別に本誌の讀者に頒つことにしたのは、一つは、これを参照すべき關心者が、歴史哲學問題の吾が學界に於て漸く注意さるゝに至つた今日、番に史學の徒のみでなからうと思はれたからである。この領域に於ける内省と訓練とが、われらクリオの兒に取りて本質的に極めて必要なるは、勿論である。因て序に、リース博士の著に『史學史的思索及び研究的機關』Historik, ein Organon geschichtlichen Denkens und Forschens, Bd. I. Lpz. 1912 一本あることを指摘しておかうこれは史學の原理原則といふやうな方法學的方面に關する尤も具はれる述作の一である。

私の對照させた兩家の大著作(ウエーベルのは第二版)が書かれてから、今日まで約四十年の史界に取りても意義淺小ならぬ時が流れてゐる。この間に於ける史學の進歩は、管見によれば大體三様ある、第一、史觀そのものゝ進化和充實、第二

從來の歴史對象、就中、古代東方に於ける最古の發展事實に關する新發見、新説明、隨て、その把捉の革新、第三、最近に於ける多事多變にして、豊富さと廣大さと意義の深長さに於て振古未曾有なる世界史的新事象の産物、是れである。

さればゲーテは既に言つて居る、『世界史は隨時に書き易へられねばならぬ、これは今日吾々には疑はれ得ないことである、かくの如き必然の生じるのは、單に幾多の事件があとから思ひ出されたからといふのではなく、相俱に進みゆく時代を享けてる者が新しい觀照へと導かれ來て、その立場から過去の事實が一の新しい仕方で觀察判斷し直ほさるべきからである』。これはリース博士のその世界史緒言に引用する所で、吾々にも啓示に價する警句である。もとゞウエーベル自身の遣つた第二版も實に同じ趣意に基いて居た。それが數十年後の今日から觀られると、如上の三大理由の

下に、一層根本的改造を要した。この要求に應じて起つた第三版の著者は、自ら單にウエーベルの改造者のみでなく、今日の世界史の、よしや全然改造者でなくとも、少くとも最新典型的建設者とならうと期するやうに思はれる。

楮私に接手し得たといふ最初の二卷は、最古から紀元前一三三年迄に亘つて居る。その特色の一つは、ウエーベルの取つた隨時隨處に於ける本文中に細字を以て補説を挿入する方法を廢して、每卷の末尾に豊富なるエルロイゲルンク備考を附してあることである。この新装置は猶ほ或意味に於てランケの取つたアナネクタに比當しうる、殊に第一卷に於ては、前記の私の見立てた世界史學増進の最近動機機の第二に相當する局面に關するが故に、尙ほ更ら潤澤且つ斬新で、文字分量に於て實に全一卷の約三分の一を占めて居る、以て著者の努力と親切と忠實とを想見すべきである。尙ほ之を著者が一

昨々年に公けにした前掲の「小世界史」に比すると著者の世界史的時代把握が、この第一巻、古代東方時代に於て進展して居ることが眼に著く。即ち前著述に於ては四個の相つゞく章中に收められ、内容上殆んど三大時期に分割されて居るやうに思はれる最古史の部分が、現著書に於ては、唯だ一章（第二章）となりて「最古の世界史的諸民族新社會」（紀元前四二四—一七四五）と集約されて居ることは是れである。

特に私が摘出したいのは、既に注意した同時代綜合的把握が著者の獨得最大の武器となつて居ることである、即ち是れ、故著者に缺け、隨て、原著者の眼界から別に新なる天地を拓いて本著を優越なる觀照に高めた所以の有力因子である、何せならそこに單なる史實的羅列蓄積ではなく、歴史生活の統一が貫いて居るからである。しかし、かかる統一の把握が廣汎普遍なればなるほど、何等

かの暴力強制が伴ひやしないかといふ虞れは、吾々世界史家の日常作業に際して毎に等しく體驗する良心的苦惱の一である。かゝる弱弊から、ウエーベルの改作者は果して奇麗さつぱりと洗脱して居るであらうか。この點につきて、幾多の共鳴的傍觀者といへども、尙ほどころ／＼に於て著者と看る所を異にすることであらう。

例へば、第二卷に於て、著者は第一章として「ペルシャ戰役及び羅馬階級闘争の時代」の題下に五節を分設し、その第三節に「羅馬民衆の最初の組織」〔四九九—四六六〕を説き、第四節「アテーネ海上版圖の創立」〔四七七—四四四〕を中間に置き、之を飛び越えてから、第五節として再び「羅馬の政職に對する民衆の合法的接近」〔四七四—四四四〕を描き出して居る。この排列は、固より地中海沿岸を統一的文化場裡と見る最近史觀からいつても、南方イタリヤといふ希臘人、カルターゴ人、

エルルスキ人、羅馬人らの接觸交渉地の機縁があるといふことからいつても、著者の取扱ひ方には十分の把握ハルゲンクト點は有り得やう (二四頁 第三節 四五頁 第五節の各始めの文を看よ) 即ち、そこに著者の世界史觀の強さと統一的技巧コンストクリフの手際さが看取されるが、而も之と同時に彼此の往來のためにも全體影像の錯雜を來す嫌があるではないかとも疑へる。一矢二兔を射がたく天二物を與へず。吾々後進世界史家も亦た絶えず思を致すべき點、常にこゝにありと思はれる。

本著は八折版で、第一卷備考索引共六四三頁、第二卷同じく七一五頁から成る。かゝる大量内容を一朝詳細にレヅエーすることは容易の業でない今は只だその大體に止めておくばかりである。

聞かが如くば、著者漸く老齡に入り、而も元氣ますます旺盛、このウエーベル改作を以て晩年畢生の業とし、祖國の大艱難に伴ふ固有の生活の不

安と奮闘しつゝ、毎歲一卷づゝ出版のプログラムを定め、太祖ランケの世界史の大業未完成なるを遺憾とし、精進努力、この新計畫の等しくトルンに終らしめざるを期するといふ。その意圖の壯烈は寧ろ學界の偉觀と謂ふべきである。今や前述の如くその二卷既に出づ、前途尙ほ十四卷横はり存す。吾々は斯學のため切に博士の健在を禱らざるを得ない。

(六月三日)